

## 戦前における「満洲」への修学旅行

高 媛

### プロローグ：帝国・戦争・観光

大英帝国の黄金期と呼ばれるヴィクトリア朝時代（1837-1901）の幕開けから四年、近代ツーリズムが、イングランド中部の地方都市レスターで産声をあげた。熱心な禁酒運動家で、巡回宣教師であったトーマス・クック（1808-92）が、新しく開発された鉄道と蒸気機関車を利用して、ラフバラ市での禁酒大会への団体旅行を成功させた。そのころの大英帝国は、産業革命で磨きあげられてきた工業力と、植民地収奪から蓄積されてきた富をベースに、19世紀前半まで、国内に鉄道のネットワークを完成していた。馬車から蒸気機関車への革命的交通手段の進化が、クックに新しい時代の到来を予感させたのである。

同じ頃、海の彼方で、イギリスは中国にアヘン戦争（1840-42）を仕掛け、武力をもって開国させた。やがて、世界の四分の一を支配する、「日の沈むことなし」の一大帝国へと膨張していくイギリスだが、この国きつての旅行者クック社も、あたかも帝国の「勢力圏」に見合うかのように、1841年の創業以来、国内からヨーロッパ大陸、そして中近東、アフリカ、アメリカ大陸、アジアへと、その「観光圏」を世界の隅々まで拡大していくことになる。

一方、1855年、その二年前の「黒船ショック」で、列強の国力を強く見せつけられた日本は、早速オランダの東洋艦隊から中古船スピン号を贈ってもらい、近代海軍教育に着手した。のちに、この軍艦第一号は、中国の典籍『易経』（周の時代、紀元前10世紀頃）にある、「国の光を観る。もって、王に賓たる利し。国の光を観るとは賓を尚ぶなり」から、「観光丸」という和名を与えられた。もとの典籍には「都市国家」の意味しか持たない「国」という言葉が、近代的意味での「国家」に読み替えられた、和製漢語「観光」の誕生である。「西洋」に「国の光」を衝撃的に見せつけられた日本が、自ら「国の光」を精いっぱい見せようとした姿が、「観光丸」という、国の命運をかけた名前からもうかがい知ることができる。やがて1899年、日本は列強から押しつけられていた不平等条約を撤廃し、さらに三年後に結ばれた日英同盟を契機に、「アジアの大英帝国」のような存在にまで昇りつめていく。

ここで確認しておきたいのは、イギリスにおける観光産業の誕生と、日本における「観光」という言葉の誕生は共通して、帝国や戦争を時代背景としているということである。イギリスと同様、帝国日本の「勢力圏」も、その臣民の「行動圏」、「観光圏」と重なりあいながら伸縮してきた。その意味で、帝国の「観光圏」の実態に迫ることは、近代日本そのものの姿を問い直すアプローチともなる。この作業の一環として、本稿は、1906年から1940年にかけて「満洲」（現・中国東北部。以下、括弧を省く）を目的地とした日本人の修学旅行史を辿り、「帝国圏」<sup>1</sup>観光が日本の近代に与えた歴史的、社会的意味を明らかにしたい。

### 一、修学旅行史のなかの満洲

1886年、東京師範学校が実施した11泊12日の「長途遠足」が、修学旅行の始まりといわれている。これは、初代文部大臣森有礼が進めた「兵式体操」の流れを汲む「行軍」に、「学術研究」の機能を合わせ持たせて実施したものである。

そのちょうど十年後の1896年に、長崎商業学校（現・市立長崎商業高校）の生徒約20名と引率教師2名が、上海への修学旅行を試み、海外修学旅行の嚆矢となった。ときは日清戦争終結の翌年に当り、道中のところどころにこの戦争が影を落としている。たとえば、参加した生徒の一人がのちに次のように述懐している。

海外へ行くというので一同勇躍して喜んだものでした。そして明治29年某日、日本郵船神戸丸に一行約20名が乗船して長崎を出発しました。当時の船長は海上保険などの関係でもっぱら英国人を採用

せる状態でした。同船は横浜丸、西京丸と当時優秀の姉妹船で、西京丸は日清戦役に仮装巡洋艦として樺山資紀將軍坐乗のもとに黄海海戦に参加し、敵の水雷艇より至近攻撃を受け、もはや命中と観念せし瞬間、不思議にもその魚雷は船底を通りぬけて無事なるを得た奇蹟がありました。その頃「当らぬ西京は宝船」という歌まであったくらい有名なものでした。かくして神戸丸は一昼夜半の航海で無事待望の上海へ到着し、日本郵船の埠頭に横づけとなり、一同上陸しました。そしてまず眼につくものはさすがは国際的繁栄の都市で、見馴れぬ高層建物や多種多様の人々、居留地警官の有髯長躯のマドラス人の姿などでした。上海滞在は2、3日で、その間長崎出身牛島某氏の経営せるホテル東和洋行（日清戦争の起因となった韓国の志士親日家の金玉均氏が暗殺せられしところ）にわれわれ一行招待を受けたり東洋鬼の罵声を浴びつつ支那人街や城内などの見物をなし、戦勝の結果利権を得て新設された東華紡績工場の見物やらですごし、別段蘇州、杭州などへ行く計画はないまま同じ神戸丸で長崎へ帰りました。<sup>2</sup>

ほかにも、熊本商業学校（1898年、上海）や、福岡商業学校（1902年、韓国）など、大陸に地理的に近い九州の商業学校は、日清戦争の勝利を契機に、旅程を中国上海、韓国まで延ばした。

上海への初の海外修学旅行からさらに十年後、日露戦争終結の翌年にあたる1906年の夏、国策会社・南満洲鉄道株式会社（満鉄）の設立に先んじて、文部省と陸軍省の奨励による、合同満洲修学旅行が実施された。満洲までの船賃や、満洲内の移動と宿泊は全部無料であるため、旅費は、宇品港までの交通費と食費だけで、自己負担額はおよそ25円。7月15日から29日にかけて、北海道から沖縄まで、各都道府県の中学校以上の男子生徒と教職員（小学校教員も含む）延べ3,694名が、陸軍省が用意した御用船に五回に分けて便乗し、三週間に亘る大旅行に旅立った。満洲修学旅行のさきがけともいべき出来事であった。<sup>3</sup>

もし、日清戦争終結の翌年から始まった上海、韓国への修学旅行が、九州という特定の地域と、商業学校という特定の種類の学校だけに限られた経験であったとすれば、その十年後の日露戦争終結の翌年に実施された「満洲修学旅行」は、国家の奨励によって、全国の中等学校以上の学校に、国民的教育行事として行われた、初の海外旅行であったといえよう。また1906年夏の満洲修学旅行は、これまで日本国内の修学旅行や、日清戦争直後の中国上海、韓国のような外国旅行とは異なり、日本の勢力範囲の最前線の現場において、「帝国の輪郭」を確認させる、格別な社会的意味を持つ旅行だったといえる。

その後、上海は、1910年代から20年代にかけて、満洲とともに、九州を中心とする商業学校の海外修学旅行の主要目的地であり続けたが、中国本土の政局不穏や中国人の排日感情の高まりなどで、満洲事変後、旅行先を上海から満洲へ切りかえた学校が多かったと思われる。<sup>4</sup>

象徴的な出来事は、満洲事変が勃発する前年に起きた。1930年6月、上海に近い観光地・蘇州で、修学旅行中の福岡商業学校生徒が、中国の傷病兵の騒動に巻き込まれ、重軽傷者多数を出したのである。この出来事は、6月17日付の『読売新聞』に、「福商生奇禍／騒乱の飛ツ散り／見学に赴いた蘇州は／運悪くも戒厳令の物騒さ」という見出しで大きく取り上げられ、その後の上海修学旅行の趨勢に大きな影響を及ぼした。

たとえば、同じ時期、満洲への旅行を企画している兵庫県御影師範学校の教員が、この記事を読んで心配になったため、南満洲鉄道株式会社（満鉄）が内地で設けた鮮満旅行に関する無料相談所の一つ、大阪鮮満案内所<sup>5</sup>に、現地の治安状況について問い合わせたところ、同所から以下の回答を得た。

予て新聞にて御承知の如く支那南方時局は遂に済南地方に迄波及せる模様候に候、同方面と満鉄線内最短距離の地奉天迄は約1千60軒の遠隔にて、殊に満洲は今回の時局には全然無関係に置かれ聊かの影響も無之、且つ満鉄沿線は我国の勢力に依りて完全に治安維持せられ居り、20万の在満内地人は意を安んじて活動致居候現状に有之候に付同地方旅行等は毫も御懸念御心配の要無之候。<sup>6</sup>

[下線は引用者による]

「満鉄沿線は我国の勢力」圏に組み入れられているだけに、中国のほかの地域とは一線を画す、日本人にとって特別な安全地帯であることが、ここでは主張されている。それ以降十年間、日本人の海外修学旅行先が満洲に集中して

いったことから見ても、帝国の勢力圏がいかにか「旅行圏」の行方を左右していたかをうかがい知ることができる。

## 二. 満洲旅行史のなかの修学旅行

実は、日露戦争の最中から、代議士や教育者、満洲の利源を調査するための実業家などが、個別的に軍艦に便乗して満洲を訪れたことはあるが、団体旅行の方は、戦争終結の翌年にあたる1906年の7月、上記の修学旅行が実施され、満洲旅行史の嚆矢となる。同じ時期、大阪・東京両朝日新聞主催の「満韓巡遊」旅行もあったが、時期が満洲修学旅行の第一回の出帆より一週間遅れている。したがって、満洲修学旅行の誕生は、満洲団体旅行そのものの誕生ともいえる。

もうひとつ大きな特徴としては、修学旅行団が全体の満洲旅行団体客で占める割合の高さである。表1に示した、1927年から1940年までの統計から、修学旅行団の参加人数は団体客全体のおよそ7割から8割ぐらいを占めていたことが分かる。

表1. 年次別に見る日本人来満団体客数

単位:人(団体数)

年度	総団体数	学生団体客	
		学生団体客	一般団体客
1924(1-12月)	10,000	—	—
1925	—	—	—
1926(1-12月)	10,000(247)	—	—
1927	9,528(254)	7,894(179)	1,634(75)
1928	12,656(283)	8,985(173)	3,671(110)
1929	19,117(362)	12,911(274)	6,206(88)
1930(4-10月)	14,609(279)	12,189(212)	2,420(67)
1931	9,097	—	—
1932(3-12月)	10,372(279)	-5,471(-101)	+2,355(+90)
1933(1-12月)	15,209(383)	11,960(223)	3,727(175)
1934(1-12月)	17,253(373)	14,258(225)	3,692(165)
1935(1-12月)	20,055(400)	—	—
1936	19,021	15,052	3,570
1937(10-3月)	1,560(36)	1,206(22)	354(14)
1938	16,388(311)	14,024(213)	2,364(98)
1939	16,336(387)	—	—
1940	16,311(371)	—	—

注：本表は拙稿「『楽土』を走る観光バス—一九三〇年代の『満洲』都市と帝国のドラマトゥルギー」（『岩波講座・近代日本の文化史第六巻・拡大するモダニティ』所収、岩波書店、2002年6月、p.223）をもとに加筆したものである。

1. 1932年の学生団体数と一般団体数にある「+」「-」の表記は前年比を表す。
2. 1933年と1934年の学生団体数と一般団体数には、中国本土と欧米客の数団体が含まれている。

1939年夏から、文部省主催による満洲、「北支」方面への「興亜青年勤労報国隊」（集団勤労奉仕隊）およそ一万人が派遣されることになり、交通機関の混雑緩和のため、単なる見学を目的とする一般の満洲旅行は制限された。次いで翌年、野外演習や勤労奉仕など戦時体制下の「戦力」保有のため、国内外を問わず長期間の修学旅行は全面的に禁止され、満洲への修学旅行もついに35年間の歴史に終止符を打たれたのであった。1943年ごろになると、「戦力増強」に直接関係のない一般旅客の満洲渡航が制限されるになり、戦前における日本人の満洲旅行史も終りを迎えた。したがって、満洲修学旅行は、その誕生から終焉まで、一貫して日本人の満洲旅行のなかで最も重要な部分であり、満洲旅行史全体の縮図ともいえる存在であった。

## 三. 満洲修学旅行を取り巻く環境

### 1. 政府の役割

表2にも見られるように、1906年から1940年にかけて、政府が三通りの渡満学生団を組織したことがある。それ

ぞれ、1906年（日露戦争の翌年の合同満洲修学旅行）、1933年（満洲国誕生の翌年、「満洲産業建設学徒研究団」と1939年（日中戦争勃発の翌々年、「興亜青年勤労報国隊」）に、日本の満洲及び中国本土への勢力の浸透に伴って実施されたイベントであるが、「見学」から「勤労」へという旅行目的の力点の移行が見られるものの、満洲への一貫した関心の高さを、政府の「公的」メッセージとして読み取ることができよう。

表2. 政府主催の渡満学生団

	1906(明治39)年	1933(昭和8)年	1939(昭和14)年
団名	満韓修学旅行団	満洲産業建設学徒研究団	興亜青年勤労報国隊
主催者	文部省、陸軍省	満洲産業建設学徒研究団(以後、財団法人「至誠會」を組織)主催、外務省、陸軍省、海軍省、文部省、鉄道省、拓務省、関東軍、満鉄、満洲国政府等後援	文部省主導、企画院、興亜院、陸軍省、拓務省、農林省、対満事務局、満洲国政府、北支派遣軍後援
趣旨	不明	1.日本民族の東亜に於ける使命の確認 2.満洲に対する正確なる理解 3.満洲国建設事業実現の認識 4.智能投資の前衛としての準備知識の修得 5.日満青年の協和結盟 6.第一線に立つ青年学徒としての心身の練磨	東亜新秩序の建設は青年の熾烈なる奉公の精神と大陸に対する深き認識とに俟つこと大なるものあるに鑑み一般青年及学生生徒を大陸に派遣し、現地に於て集团的に勤労教育を施し兼ねて不足資源の生産又は文化工作等に奉仕せしむることは極めて緊切なりと思料す
構成	中等程度以上の公私立諸学校の職員、生徒及び小学校教員	大学、専門学校生	青年隊、学生隊(大学、専門学校、師範学校生を含む)
期間	三週間	一ヶ月	一ヶ月(学生隊)
旅費	25圓ぐらい	50圓(均一)	なし(日本と満洲国政府負担)
内容	日露戦跡の見学	学術講習、現地演習、戦跡見学、賀表捧呈、皇軍慰問、武道大会、日満青年大会など	軍隊式生活、軍事教練、現地事情講話、衛生講話、作業(開墾、農事、土木、建築、畜産等)
行程	大連、旅順、奉天、鉄嶺、遼陽、營口、金州、柳樹屯(一部は營口から、奉天、撫順、安東、平壤、京城、釜山を経由して帰国)	大連、旅順、鞍山、奉天、撫順、新京、吉林、哈爾濱と奥地	満洲、「北支蒙疆」
特徴	五回に分け、陸軍省の御用船、汽車と宿舎を無賃で利用し、日程と案内もすべて陸軍省に一任する	農科、工科、法文経商、法文経医の四分団に分け、各専門の立場から奥地で研究する	出発前に茨城県内原の満蒙開拓青少年義勇軍訓練所で準備訓練を受け、現地でも専門によって配属先を振り分けられる
関連事件	日露戦争の戦勝(1905年9月)	満洲事変(1931年9月) 「満洲国」建国(1932年3月)	盧溝橋事件(1937年7月)、「国民精神総動員運動実施要綱」決定(1937年8月)、満蒙開拓青少年義勇軍募集要綱発表(1938年1月)、「東亜新秩序声明」発表(1938年11月)
その後	1907年(261名)	1934から1938年迄計4回(1937年のみ中止)	1940から1943年迄計4回

一方、満洲に対する生徒の関心を高めようとした政府の意図は、国定教科書に取り上げられた「満洲」関係の文章、唱歌の数の多さにも語られている(表3を参照)。満洲在住の言語学者・上田恭輔がこれに関して次のように推測している。「私の筆になつた『旅順戦跡秘話』或は『満洲の四季』その他二三のものが男女中等学校の国文教科書に抜載されてある位であるから、我が文部当局としても将来の日本人に向つて暗々裡に満洲見学を促して居るものと見て差支ないと思ふ」。<sup>7</sup>

表3. 国定教科書・尋常科「唱歌」篇に取り上げられた「満洲」関係の唱歌

教科書名	使用時期	タイトル	所収巻-課
第一期尋常小学読本唱歌	明治43年	「水師營の会見」	1-20
第二期尋常小学唱歌 第1-6学年	明治44～昭和6年	「広瀬中佐」	4-12
		「橘中佐」	4-20
		「水師營の会見」	5-15
第三期新訂尋常小学唱歌 第1-6学年	昭和7～15年	「広瀬中佐」	4-17
		「橘中佐」	4-27
		「水師營の会見」	5-22
第四期ウタノホン上下、 初等科音楽1-4	昭和6～20年	「広瀬中佐」	4-18
		「戦友」	5-7
		「橘中佐」	5-12
		「満洲のひろ野」	6-8
		「水師營の会見」	6-18

注：国立教育研究所附属教育図書館編「国定教科書内容索引・尋常科修身・国語・唱歌篇-国定教科書内容の変遷」、広池学園出版部、1966年に基づいて作成

## 2. 学校による奨励

1906年以後、各学校が自主的に企画した修学旅行や、旅行部や校友会による有志団体の自由見学が目立ち始めた。後者の場合、たとえ学校行事としての修学旅行ではなく、少人数有志の見学旅行であったとしても、学校当局の承認や、引率教師の参加が必要とされ、これが「修学旅行」と呼ばれたこともしばしばであった。

1923年5月、愛媛女子師範学校が、女子師範学校として初めて満鮮修学旅行を実施した。この旅の引率教員はのちに次のような感想を披瀝している。「東京旅行は二週間で、船車宿泊料は50円、満鮮旅行は同期間、65円である。甲は往復1千哩、乙は奉天までとして2千哩、距離に於て二倍の旅行が出来る。国家観念と云ふものは国内のみに居つたのでは、半分しか出来て居ない。外国を視察し、其の比較によつて初めて国と云ふ考へが明瞭になるのである」<sup>8</sup>と。すなわち、東京旅行より、満洲の方は旅費がたいして変わらない上に、二倍の国家観念を得ることができると、満洲旅行の意義深さを説いているわけである。関東大震災のあと、熊本女子師範学校や、愛媛県宇和農業学校のように、修学旅行先を東京から満洲に切りかえる学校が多くなった。

満洲への修学旅行は、1929、1930年に最初のピークに達したが、1931年9月18日に勃発した満洲事変の影響で一時的に激減した。以降、日本勢力の浸透に伴い徐々に回復し、1940年までに、毎年200以上の団体、1万人以上の学生の群が満洲に押寄せ、日本人の満洲旅行の主力勢となった。実施校は主に、各都道府県の中学校や、商業学校、師範学校、農学校、女子師範学校、高等女学校であり、入学当時から旅費を積立てる高学年の卒業旅行が多かった。地域から見れば、渡満発着港の門司、下関に近い北九州や中国地方の学校が目立つ。1936年、山口県当局が下達した『公私立中等学校宿泊旅行標準改正』によると、関東方面9日以内で経費約30円、鮮満方面13日以内で約50円になっている。鮮満方面は、関東方面とほぼ同じような気安さで出かけていたと想像できる。

このような地理的、経済的便利さとは別に、満洲国建国（1932年）は修学旅行を取り巻く環境に大きな変化をもたらした。昭和初期の不況で国内に就職機会を閉ざされた卒業生たちにとって、新興満洲国は「海外雄飛」に恰好な「新天地」となったのである。実際にこの時代に実施された修学旅行は、満洲国の発展の現状と先輩たちの活躍振りを確かめ、ひいては満洲で就職するための下見旅行の性格を強く帯びるようになった。

## 3. 旅行機関の特恵

愛媛県女子師範学校の教員の話にも出たように、満洲旅行の実施を促すひとつの要因に、国内旅行とほぼ変わらない、旅費の手頃さが挙げられる。実は、満鉄をはじめとする旅行機関が、満洲を宣伝するために、いち早く、学生と教職員向けに高率の割引制度を定着させていたのである。たとえば、満鉄が事業開始してまもない1907年7月、前年に続く文部省主催の第二回満韓修学旅行に賛同し、内地鉄道と朝鮮統監府管轄下の鉄道線が同じく5割引きであったのに対し、満鉄は8割引きといった思いきったサービスを断行した。

満鉄による割引制度の定着のすばやさ高い割引率に加え、満洲関係の汽船会社や旅館、観光バスなど、一連の観光関連機関に設けられた学生団体向けの特別割安料金も、修学旅行を満洲に向けさせる魅力の一つだったといえる。このような徹底した特恵制度のおかげで、満洲修学旅行団は、同じコースで行く普通団体の6～7割ぐらゐの旅費で賄うことができていた。

## 四. 修学旅行生の「まなざし」

「まなざし (gaze)」は、眼という器官を通じて、外部環境の物事を自分の身体の内部に反応させる知覚である。フーコーは、「まなざし」について示唆してくれたように、「個々の観察者」自身のまなざしより、「制度によって支えられ正当化された医師の眼差し」が観察者の内面に入ってしまうのである。ジョン・アーリはフーコーのこの「まなざし」の概念を糸口に、観光客のまなざしは医学用語の「まなざし」と類似し、社会的に構造化され、組織されているものだと論じる。ツーリストのまなざしは一見無軌道にみえるが、いずれも「社会体験とか社会意識の非観光状態との関連性から構成されていく」のである。したがって、まなざしは「社会的行為や社会的記号のシステムを前提にするわけである」。<sup>9</sup>

それでは、満洲修学旅行生徒のまなざしに、どのような社会的烙印が押されていたのだろうか。修学旅行の日程表

の作成や、生徒の感想文、インタビュー記事などから、大まかに三点に絞って分析することにする。

### 1. 「戦跡」と「富源」

旅行の日程に目を凝らすと、主に二つのパターンの見学地が多く盛り込まれていることが分かる。ひとつは、二百三高地（旅順）や北大営（奉天）、南嶺（新京）といったような、日露戦争、満洲事変の戦跡であり、もうひとつは、撫順炭鉱や鞍山製鉄所のような、日本人による満洲開発の重要スポットである。

ここから、領有すべき満洲と、開発すべき満洲という、二つの典型的満洲への欲望を読み取ることができる。そして、新たに日本の勢力範囲となった戦跡を踏み、「幾多の同胞勇士の奮闘の上を追想し、且つ新植民地に於ける我経営の一般を通覧せんとし」<sup>10</sup>た生徒たちは、戦死した「同胞」と、活躍している「在満同胞」と、自分自身の三者からなる集団内共有の歴史を確認し、民族共同体としての絆をより一層意識し、強化していくのである。

### 2. 「亡国の民」／「戦勝国民」

ロシヤ町の所謂ロシヤ式の市街を見ては先づ一驚し、その他至る所に立てる家々を見ては如何に露国が苦心して此町を設計せるかを思はしめぬ、さても数億円を投じて漸くにして仕立て上げたる此大連を失ひたる彼れの心は如何ばかりぞや、思ふに有難きは戦捷国の余光よ、われらの如き青書生の此異国の大地をふみつくるを得るハ、あゝ、さても、賤民の如くに取り扱はるゝ清国民の心は、靈は、眠れるか、はた死せるか。<sup>11</sup>

これは、豊岡中学校（現・兵庫県立豊岡高校）の生徒が、1906年夏、大連市内を回ったときの感想である。短い文章のなかに、「戦捷国」民としての自分自身、敗れてこの町を去ったロシア人、そして「賤民の如く取り扱はるゝ清国民」の三者が出揃っている。

満洲修学旅行は、そもそも日露戦勝によって道を開かれていったのである。日本の政治的優位のもとで展開された観光行為であるだけに、生徒たちのまなざしもその社会的権力関係に深く影響されるはずである。ここで、「外なる他者」のロシア人と清国民に向けられたまなざしはすべて、「戦勝国民」としての自分との関係性のなかで差異化しながら織りなされているのである。

### 3. 「英霊」／「醜業婦」

一方、「内なる他者」へのまなざしのあり方にも興味深いものがある。1912年、大連で発行された邦字紙『満洲日日新聞』に次のような記事が載せられた。

一高生がはるばる内地から旅順戦跡めぐりに団体を組んでやつて来た。／「何が一番深く印象に留まりましたか。矢張、旅順の戦跡でせう」と問ふと、一名、腕を扼し、「いや、よく尋ねて下すた。先刻から申上げ度かつたのですが……あの小崗子とか云ひましたね。支那人の中に同胞が醜業を営むであるのは実に言語道断です。実に国辱だ。何とか罷めさせる法はないでせうか。」と悲憤慷慨されしには、今更なるが答辞に窮せり。<sup>12</sup>

ここでは、「英霊」と「醜業婦」という、二つの対極的な「内なる他者」が提示されている。「醜業婦」が「国辱」とまで見なされたのは、いうまでもなく、彼女らが生徒たちの想像した日本国民らしい「まともな姿」に泥を塗ってしまったと思われたからである。「同胞の英霊」が安眠できないとか、「国の恥辱」とかのような、ナショナルな価値判断を基準とする語りの背後には、確固たる民族的アイデンティティへのこだわりが前提として想定されている。ナショナリズムは、国民国家内部での画一的な国民化を要求し、それは常に社会弱者やマイノリティの「外部化」を伴わざるをえなくなるのである。国民の「外」に向ける抑圧的なナショナルな語りと同時に、その「内」にある性差別や階級差別をうまく隠蔽してしまったのである。「醜業婦」は国への貢献度が低いため、「我々」の視線から疎外され

る。「我々」の自画像に映ってほしくない姿として彼女ら排斥することによって、生徒たちは「理想的な国民像」への自己同定を図ろうとしたのである。

### エピローグ：満洲修学旅行の社会的意味

修学旅行は国家が管理する学校教育の一環である。学校教育はナショナル・アイデンティティを形成するのに重要な役割を果たしている。この意味で、日露戦争後、満洲旅行がまず修学旅行から始まったのも、あながち偶然のことではない。

文部省と陸軍省との協力と奨励のもとで、地理と歴史の授業の一環として日常的な学校教育に巧みに組み込まれた満洲への修学旅行は、「帝国圏」における国民的な巡礼の形で展開され、「帝国の輪郭」を確認させ、「帝国の光」を実感させる国家装置として働いていたのである。

一方、このような政治イベントが及ぼす感化の作用は、単なる修学旅行に参加した生徒だけにとどまらなかった。旅行報告会の開催や、旅行記の編纂、校友会雑誌の学校同士の寄贈などを通して、さまざまな形で社会的効果を広げていく。たとえば、1925年から1939年まで毎年、満洲と中国大陸への修学旅行を実施しつづけてきた東京府立第一商業学校（現・東京府立商業高校）は、1931年12月、生徒の旅行報告集『大陸を歩みて』を『僕等の見たる満洲南支』と改題し、富文館より定価1円50銭で一般向けに刊行した。非売品から市販へといった修学旅行記の社会化プロセスからも、満洲修学旅行の意義が、すでに学校の垣を飛び越え、社会に波及していったことをうかがい知ることができる。

「京阪にあつては、郷里は愛媛県である。満洲にあつては其の郷里は日本である」。<sup>13</sup> 愛媛女子師範学校の引率教員がこぼしたこの感慨こそ、内地のどこかではなく、「満洲」で実施された内地生徒の修学旅行の特殊な意味を、いみじくも言い当てているのではないだろうか。

### 注

- 1 台湾、朝鮮のような植民地に限らず、関東州（租借地）や満洲国（傀儡国家）、南洋（委任統治）など、日本帝国のさまざまな支配様式が存在していた。これらの地域をカバーできるような言葉として、ここで「帝国圏」という造語を用いることにする。
- 2 長商創立七十五周年記念誌編集委員会『長商卒業生の生活と意見——母校の歩みに因んで』、長商創立七十五周年記念事業協賛会、1961、p.248-249。
- 3 詳しくは、高媛「満洲修学旅行の誕生」、『徬書月刊』通巻第215号、弘隆社、2003年8月号、p.10-13を参照されたい。
- 4 たとえば、日本初の海外修学旅行を実施した長崎商業学校が、上海を訪れた年は、1896,1901,1902,1903,1906,1917,1929,1930年の各年であったのに対して、満洲地域へは1916,1927,1928,1932,1933,1935,1936,1938,1940年の各年といったように、満洲事変を契機に、旅行先を上海から満洲に移行したことが分かる。
- 5 1918年7月に、満鉄が、当時経営を委託された朝鮮鉄道とともに日本内地で設立した、満洲旅行を専門的に取り扱う無料相談所である。満洲事変前までは東京、大阪、下関の三ヶ所にしかなかったのを、1939年までには9都市10ヶ所に増設した。
- 6 『甲陽』第46号、御影師範学校校友会、1931年3月、p.298。
- 7 上田恭輔「満洲の旅と北海道の旅」、『満蒙』1933年8月号、満洲文化協会、p.120
- 8 統率職員「女子師範の満鮮旅行所感」、『愛媛教育』第434号、1923年7月10日、p.33。
- 9 ジョン・アーリ、加太宏邦訳『観光のまなざし』、法政大学出版局、1990=1995。
- 10 東京高等師範学校修学旅行団記録係『遼東修学旅行記』、1907、p.229。
- 11 『達徳』第11号、達徳会（豊岡中学校校友会）、1907年1月、p.122。
- 12 1912年7月26日付『満洲日日新聞』。
- 13 同注8。

附記：本稿は、第五回国際学シンポジウムにおいて報告した内容をまとめたものである。発表の機会を与您にいただいた内田忠賢先生をはじめ、会場で貴重なコメントを寄せていただいた方々に、厚く御礼を申し上げます。